

筒井康隆「48億の妄想」論

—「疑似イベント」から逸脱する意志と苦悩—

松山哲士

はじめに

筒井康隆「48億の妄想」は、一九六五年一二月に早川書房から書下ろしで発表された長編小説である。本作品では、テレビが大衆に対して絶対的な影響力を持つ。そしてテレビは、報道に刺戟性を加えるために、事実を歪曲して誇張する「疑似イベント」を充満させる。さらには、テレビ局が日本と韓国との対立を扇動し、日韓海戦という出来事を作っていく。ここでは、テレビの影響力に翻弄される大衆と、テレビの影響力に懐疑的で大衆の動向から逸脱していく、「銀河テレビ」のディレクターの主人公折口、浅香外相の娘暢子、韓国船に銃撃された「紫竜丸」の船長脇田という三人との対比の構図が描かれる。

先行研究は、「疑似イベント」に取り込まれていく作品世

界に注目し、本作品から情報化社会の構造を論じてきた。しかし、折口と脇田と暢子が「疑似イベント」化する社会に懐疑的であり、「疑似イベント」に翻弄される大衆から孤立していくことは論じられていない。そこで本稿は、まず、折口、脇田、暢子が「疑似イベント」から逸脱する意志を持つ過程を分析する。そして、日本が大敗する日韓海戦において、参加者のうち折口と脇田のみが生存する意味を見出す。さらに、結末部で大衆から孤立し生きづらさを抱え、テレビを再び意識する折口の様子から、本作品が「疑似イベント」化する社会を描くだけでなく、「疑似イベント」から逸脱する必要性を描出しつつ、逸脱が容易に達成できない現実を風刺した作品であると論ずる。

一、先行研究の動向

本作品を論ずるに先立ち、まずは本作品の先行研究の動向を整理し、本稿での論点を明確にする。

石川喬司は本作品を、筒井が「頼もしい成長を示した」⁽¹⁾と好意的に捉えた。その後「ブーアステインの『幻影の時代』⁽²⁾」を踏まえて、情報社会のゆきつく姿を巧みにデフォルメしてみせた傑作⁽³⁾と評価した。アメリカの文明史家D・J・ブーアステインは、『幻影の時代』が「マスコミが製造する事実」⁽⁴⁾で、一九六二年当時のアメリカにおいて、出来事を作り出す新聞によって「合成的な新奇な出来事がわれわれの経験には充滿している」ことを「疑似イベント」と称した。

先行研究は、この「疑似イベント」が人間や社会をどのよう⁽⁵⁾に導くかを論じてきた。例えば、権田萬治は「氏の根底に潜むシリアスな文明批評がより直接的な形で描かれている作品」と評す⁽⁴⁾。また、奥野健男は「テレビ・スタジオの中のにせの空間、フィクションが、真の現実の政治空間となり、人々が死ぬ恐ろしさを描いている」とする⁽⁵⁾。あるいは、柘植光彦は「筒井康隆がとらえた『社会』」が「疑似共同幻想における疑似関係を軸とする情報化社会」であることを「具体的に表現」していると

述べる⁽⁶⁾。さらに、異孝之は「物理的な超常現象どころか精神的な錯乱現象によって国家が、そして時代が稼働することが大いにありうることを、生き生きと描」き、「センサーシヨナリズムの本質を鋭利に突く」と指摘する⁽⁷⁾。

このような論点は、マスメディアが社会をどのように捉えるかという観点へと派生し、「疑似イベント」に翻弄される人間の愚かさを論じていく。関井光男は「疑似イベント」としてのニュース製造を社会構造の変化としてとらえ、「『疑似イベント』への過大な期待に憑かれ、新奇な出来事へのめり込んでいく人間の愚直さ」を描いたとする⁽⁸⁾。また、扇田昭彦は「テレビ的な類型化した演技のパターンが登場人物たちを支配する座標軸で、それをからかう作者の風刺精神・批判精神が横溢する」ために、「ステロタイプ化した仮面が時代の強大なイデオロギーと化して人々を束縛し支配するおぞましくも滑稽な光景が危機感をもって提出されている」と示す⁽⁹⁾。

さらに、発表当時から社会構造に変化が見られないことから、二〇一〇年代に入り、現代の情報化社会を予見したものととして本作品が見直され始めた。日下三蔵は「ここまでの確に社会の進む方向を予測していたSF作家の想像力が凄い」と称賛し⁽¹⁰⁾、「マスコミがすべてを支配する「一億総テレビ時代」を予見し

ていて驚かされる¹¹⁾と述べる。また、佐々木敦は「驚くほどに現在の社会を予見していい」で、「メディアやテクノロジーはアッブレードされても、人間の愚かさというものは基本的に変らない」と記す¹²⁾。

このように先行研究は、「疑似イベント」に取り込まれていく作中人物に注目し、情報化社会の構造を論じてきた。しかし、折口と脇田と暢子が「疑似イベント」化する社会に懐疑的であり、「疑似イベント」に翻弄される大衆から孤立していくことは論じられていない。そこで次章では、まず「疑似イベント」が何であるかを示し、本作品でどのように描かれているのかを分析する。

二、「疑似イベント」と大衆の思考、日韓問題

先行研究で本作品との関連が指摘される、マスメディアによって作り出された出来事が充滿する「疑似イベント」は、アメリカの文明史家D・J・ブーアスティンが表した。ブーアスティンは、一九六二年当時のアメリカにおける新聞の特性と大衆の期待との関係性について、次のように指摘する。

われわれは新聞がニュースを満載していることを期待している。もし肉眼にも、あるいはふつうの市民にも見えるニュースが存在しないとしても、われわれは、活動的な新聞記者にはニュースが存在するに違いないと期待する。成功した記者とは、たとえ地震や暗殺や内乱がなくても、ニュースを見つけ出すことができる人間のことである。もしもニュースを見つけ出すことが出来なければ、著名人インタビューするとか、月並みな事件から驚くべき人間的興味を引き出すとか、「ニュースの背後にあるニュース」を書くとかの方法によって、ニュースを作り出さなければならぬ。(中略)

合成的な新奇な出来事^{イベント}がわれわれの経験には充滿しているが、私はそれを「疑似イベント pseudo-events」と呼ぶことにする。この pseudo という接頭語は、「偽物の」あるいは「人をあざむくための」という意味のギリシャ語から来たものである¹³⁾。

この著書は、筒井の作品創作に大きな影響を与えた。筒井は「この社会科学書を読んだ時の衝撃は今でも憶えてい」と述べ懐し、ここから「大きな出来事を常に求める大衆の期待によっ

て、ついに戦争が起るというテーマ」を得て、短編「東海道戦争」(『SFマガジン』一九六五年七月)を書いたと明かす¹⁴⁾。また、筒井は「48億の妄想」を、「東海道戦争」のテーマを拡大したもので、「疑似イベントSF」の決定版のつもり」で創作したと述べる¹⁵⁾。さらに筒井は、本作品について、「一般社会がマスコミを通じてしか認識できないことを問題意識として取り上げ、「そこから逃げなければならぬというテーマ」を描いたとする¹⁶⁾。つまり、本作品は、ブーアステインの示す「疑似イベント」を強く意識した「東海道戦争」からテーマが地続きに展開され、その「疑似イベント」から逃げる必要性が描かれる。このようなことから、本作品の冒頭部では、次のような状況が語られる。

ニュース・コメンテーターの迫力が、以前の倍以上も重要な条件とされている現在、迫真性の名のもとに事実の歪曲がたくみに行われたのも当然だった。(中略) また、刺戟の強い報道の大量性に慣れてきた大衆の側でも、より強い刺戟を含んだ報道でなければ、反応を示さなくなった。こうしてニュースの送り手と受け手のあいだの悪循環が、報道コミュニケーションの全体にひろがり、今では報道の

同時性、迫真性、新奇性の範囲をこえた刺戟性だけの追求が始まっていた。

マスメディアが「刺戟の強い報道」を目指すために「事実の歪曲」を行うことや、ニュースの受け手である大衆が「より強い刺戟」を求めることは、「疑似イベント」化した状態にあると言える。すなわち本作品は、大衆が「刺戟性」を重視する「疑似イベント」化した世界を描くのだ。

この状況を象徴的に表すのが「テレビ・アイ」という装置である。「テレビ・アイ」とは「取付自在の小型無線テレビカメラ」であり、「日本国中のここぞと思われる場所には洩れなく配置されて」いる。そこで撮られた映像がテレビで放送される仕組みである。また、大衆はテレビに出演することに対して異常な憧憬を抱き、「すべての人間が、家から一歩外へ出さずればアイを意識し」、「あわよくば放送してもらうために人びとが行動」している。つまり、「テレビ・アイ」はテレビと大衆とを直接繋ぐ役割を果たし、大衆の行動に影響を与える。

この設定について、三浦雅士は「テレビ・アイはそのまま人間の自意識の象徴」であり、「テレビはたんに人間の肥大した自意識を拡大してみせるひとつの仕掛けにすぎない」と論じ

る。⁽¹⁷⁾ また、平岡篤頼は「間接的に見られること、また、見られたいと希うことが、われわれの行動をも内発的必然の伴わない『疑似行動』に変えてしまった」と指摘する。⁽¹⁸⁾ たしかに、テレビと人間の自意識との関係に着目すれば、両氏の論考によつて、作品世界の「疑似イベント」性や、「テレビ・アイ」に行動を規定される大衆の位置づけが明確となる。

さらに、「疑似イベント」と「テレビ・アイ」との関係性と合わせて丹念に描かれる事象に、日韓関係の問題がある。作中では浅香外相が日韓会談に臨もうとするが、テレビ局は、日韓会談での浅香の言動を、テレビ局側で作りに出したストーリーに誘導しようと画策する。浅香は「決裂であろうこと」が予想される日韓会談より、テレビ局の方をより怖れる。すなわち、テレビ局は日韓の外交にも介入し、外相を上回る力を持つ。浅香は、「日本記者クラブ」の委員長である隅の江に詰め寄せられ、その心労が原因で急死した。そして、「浅香外相が急死した数日後——日韓会談がある筈だった日の夕刻」に、「済州島南方、もとの共同規制水域ライン上で、日本漁船が韓国船に銃撃を受け、二人の死者を出す」「紫竜丸事件」が発生する。大衆が「疑似イベント」として日韓の報道を追求した結果、浅香外相の生命が失われ、浅香の死と関連して「紫竜丸事件」が生じるのだ。

なお、日本の漁船が済州島近海で韓国船から銃撃を受けるといふ事件は実際に起きたものであり、報道もされた。⁽¹⁹⁾ この背景には、一九五二年一月一八日に設定された「李承晩ライン」が関係し、本作品にも描かれている。また、筒井は本作品執筆にあたり、作家の今日泊亜蘭や、実際に韓国警備艇から暴行を受けた一野万吉に取材したことを明かしている。⁽²⁰⁾ ただし、本作品における日韓問題について、筒井は「社会的良識人の響感を買」わないために、「題材のひとつとして僕の周囲から、いわばラ ندラム・サンプリングに近い形で選んだだけで他意はない」と言及する。⁽²¹⁾ すなわち、作中で描かれる「疑似イベント」化した日韓問題は、作品の主題を表すための手段に過ぎない。むしろ、「疑似イベント」から逸脱し、大衆から孤立していく折口、脇田、暢子にこそ焦点を当てるべきである。しかし、この三人の人物には、これまでの研究では言及されていない。次章以降でこの三者の役割について詳しく考察していく。

三、「疑似イベント」から逸脱する意志

本章では、テレビが絶対的な影響力を持つ作品世界において、その力を問題視する「銀河テレビ」のディレクター折口、

浅香外相の娘暢子、「紫竜丸」の船長脇田の立ち位置を分析する。これらの人物は、「疑似イベント」から逸脱する意志を持ち、大衆から孤立していく。

まず、主人公折口の気質を述べる。「銀河テレビ」のディレクターである折口は、「大衆の第一の要望」である「事件と報道との同時性」を満たそうと日々奔走し、「事前に予期することのできなかつた事件のばあい」は、「詳報性」「現実性」「表現性」「正確性」などのおまけを、ワンサと盛り込みに、報道コミュニケーションで求められるものを満たす手腕があった。交通事故、裁判、葬式、殺人事件の中継や構成、取材まで手掛け、大衆に強い影響を及ぼすテレビの中核的存在であった。

だが、このような折口の立場は、暢子との関係を契機に変容する。折口は、急死した浅香外相の葬儀の中継を担当する。葬儀の参列者は憧れのテレビに映ろうと、葬儀の会場に設置され、中継に使用される「テレビ・アイ」に向かって過剰に泣く。しかし、暢子だけは「テレビ・アイ」の前では涙を見せず、「テレビ・アイ」のない場所で一人静かに泣く。その様子を目撃した折口は、後日暢子と二人きりで会い、その理由を問う。そこで暢子は次のように言う。

私、今の社会って、お芝居みたいな気がしてしかたがないの。(中略) 本当の社会生活ってものが、別のどこか遠いところにあって、現実の社会生活は、本当の社会生活をカリキュアライズしたものに過ぎないという気がするの。人間的なものがなくて、皮相で、嘘みたいに思えるの。(中略) 人間が今の人間社会の中で営んでいる人生は認めないわ。だって夢みたいな気がするんですもの。テレビ・ドラマのような、現実じゃないような気がするんですもの。実態がなくて、ぜんぶスクリーン上の出来ごとのような気がするんですもの。

暢子は、テレビの力が絶対視される作品世界において、その力を疑問視する位置にいる。そして、暢子と関わる折口は、この場面を契機として、テレビ局に属する立場にありながら、次のようにテレビの持つ力に対して懐疑的な姿勢を取るようになる。

彼女と話したのは、ほんの十分足らずだった。しかし折口はすでに暢子から深い影響を受けてしまっていた。ひとまわりも年齢の違う娘から——そう思っただけで折口は苦笑し

た。彼は彼女の喋った言葉よりも、むしろ彼女のごく些細な振舞いから感銘を受けた。彼女の振舞いによって彼女をとり巻いていた異様な雰囲気は、彼女のひとつひとつの言葉が、本当に彼女自身の本能あるいは衝動から出たものだということを、はつきり示していた。

折口はさらにタバコをふかし続けた。いつの間にか膝を組み、ながい足を片方、恰好よく前へつき出した彼の得意のポーズをしているのに気がつき、あわててその足をほどいたりした。

暢子は、テレビ局に属する折口と会っても、「テレビ・アイ」が映し出す場所においても、態度を装うことなくありのままの思考を語った。折口は、「疑似イベント」に支配された社会への疑問を示す暢子に多大な影響を受ける。その影響は、「テレビ・アイ」に向けて意識された折口の「得意のポーズ」をやめさせるほどのものであった。

この一連の出来事について、永島貴吉は、折口が「自らの携わる仕事が疑似的なものだとわかって、他に生きる道は見出せない」という「情報化社会におけるアイデンティティ・クライシスの問題」を指摘する⁽²³⁾。たしかに、暢子との関係によって

折口の価値観が変化し、自身の置かれた立場を自ら否定するという自己矛盾が生じる。同時に、テレビへの批判は、テレビを盲信する大衆から隔絶することも意味する。だが、暢子と関わった結果「テレビ・アイ」向けの仕事をやめるという出来事は、折口がテレビとの向き合い方を再考し、テレビの力に影響を受けない新たな価値観を見出そうとしていることを表す。ここに折口の思考の転換点を見ることが出来る。

次に、脇田の立場を見る。作中の済州島において、韓国船の銃撃を受けた「紫竜丸」は、その後「銀河テレビ」に事実を歪曲され、「疑似イベント」として取り上げられる。「銀河テレビ」は「紫竜丸事件」の報道に刺戟性を付すため、生放送での再現ドラマを企画する。それだけでなく、「本当らしい雰囲気」と「迫力」を出すために、標準語を話す折口に方言を教育する。ただ、本当の方言では「聞いている方で何をいつてるのかわからない」ため、脇田には「言語学者と民俗学者に共同で作らせた架空の田舎言葉」を教える。「銀河テレビ」は事実からかけ離れた「疑似イベント」としての放送を企図する。

しかし、この「疑似イベント」は失敗に終わる。「紫竜丸事件」の全貌を伝える「ニュース・ショー」の本番直前に、脇田が「船員になるタレントの演技が、実際と違う」と言い出すか

らである。脇田によれば、「船員が実際にやられたのは、ただの小銃」であるが、「銀河テレビ」は「人間とすり替えられた人形が、五体バラバラになって花火みてえに飛び散る」様相を放送しようとしていた。脇田は不満を抱えたまま再現ドラマの生放送に臨むが、韓国船の攻撃を受ける場面を演じる際に、次のような事態となる。

船長は手摺りに駆け寄ろうとも、叫ぼうともせず、そのままだデッキに、へたへたとすわりこんでしまった。彼は茫然として、あたりに砕け散ったゴム人形の破片と、その人形の腹につめこんであった赤インクが飛び散った痕を見まわしながら、力なく首を左右に振り続けた。「うそだ」彼は弱々しく呟いた。「これは嘘だ」

この場面において、生放送であるにも関わらず、脇田がテレビ局や大衆の期待する演技を完遂せず、脇田の心から湧き出た衝動的な言動をした点は重要である。脇田は、強大な影響力を持つテレビ局の意図には従わず、自らの感性に従う異端的な存在となる。この脇田の立ち位置は、後の展開でも肝要な役目を担う。

このように、本作品において、出来事を作り出す「疑似イベント」を通じて、大衆への絶対的な影響力を持つテレビについて、その影響力を盲信する大衆と、懸念を示す折口、暢子、脇田という対比構造が表れる。この対比構造によって、三者の「疑似イベント」から逸脱する意志を描出し、本作品の主要テーマへとつながるのである。

さらに検討を要する事柄は、折口と脇田が「銀河テレビ」の企画する日韓海戦に参加することである。そして、共に参戦するテレビの力を盲信した著名人が全員死亡するのに対し、折口と脇田の二人だけが生還し、暢子だけが二人を迎えるという結末へと展開する。この展開が意味する事柄について、次章より考究する。

四、日韓海戦という「疑似イベント」からの逸脱

本章は、作品後半部のメインストーリーとなる、日韓海戦の内容を考察する。日韓海戦は、「日本記者クラブ」の委員長である隅の江が、「紫竜丸事件」の「報復攻撃」として発案した。だが、その実情について隅の江は、「韓国のテレビ、ラジオ、新聞、いずれもこの喧嘩には大賛成」で、「最近、あつと驚くような

大事件がなくて困っているという点では、むこうもこちらも同じ」だと言う。そして、「銀河テレビ」に企画を持ち込み、番組の編成を提案した。つまり日韓海戦は、日本と韓国の両国のマスメディアが意図的に作り出したのである。

日韓海戦には、折口と脇田と、大衆への影響力を持つ俳優やスポーツ選手などの著名人一〇人の計一二人で出撃した。出航する二隻の船には、それぞれ「五十あまりのテレビ・アイ」を取り付けた。「無線電話のアンテナや、ゆるい弧を描いたレーダー・アンテナ、二つの輪を組み合わせた方向探知機のループ」など、戦闘に必要な種々の装備と並置される形で「テレビ・アイの送信装置が高くそびえて」いる。船内の映像を記録し、その様子をテレビで放送することが、戦闘と同程度に重要視されるのだ。加えて、「三万人を超乎欲送者」が出航を見送る。すなわち、日韓海戦に対する大衆の期待が大きいことが分かる。つまり、日韓海戦という出来事そのものが、マスメディアの作り出す「疑似イベント」なのである。

この日韓海戦について、関井光男は、参加した二人は『疑似イベント』の生贄であって、韓国に裏をかかれ悲愴な最後を遂げてしまうと、『疑似イベント』の対象になってしまう」という「出口のない『疑似イベント』の恐ろしさ」を、「現代社

会の病巣のようにすら見えてくる」と主張する²³。また、永島貴吉は「マスコミは、大衆の期待を写し出す実体をもたない鏡でありながら、強大な共同幻想として存在している」とし、「個人は情報として消費されるしかな」く、「意識的にも無意識的にも、この構造から抜け出すことは許されていない」と論じる²⁴。

関井も永島も、日韓海戦の「疑似イベント」性に本作品の主題を見出し、「疑似イベント」から逃れられないことを論じる。しかし、注目すべきは、折口と脇田が、作中の世界が「疑似イベント」の状態にあることを見抜いたうえで日韓海戦に参加することである。そして、「疑似イベント」に取り込まれた著名人が次々と死亡するのに対し、折口と脇田のみが生還するのだ。この両者こそ「疑似イベント」から逸脱する存在として注意を払うべきであり、本作品の主題もこの二者が大いに関係するのである。

特に折口は、テレビ局が主体となつて日韓海戦が展開することとに危機感を覚え、テレビ局の意図に反して主体的に動き、テレビの支配から逃げ出そうと画策する。テレビ局に属する立場にありながら、このような行動を起こすことへの葛藤は、次のように描かれる。

そして今、またも作られた事件——疑似イベントの渦中に叩き込まれてしまった。なぜならこれは、作られた戦争だからだ。ニュースに餓えた大衆の期待に応えるため、マスコミのでっちあげた戦争だからだ。しかしおれは、何のために彼らの期待に報いてやらなければならないのだろうか？ 何のために奴らの幻影に登場してやらなければならないのだ？ もちろんそうしてやれば、彼らは喜ぶだろう。だがそれだけでは済まない。また次の、より大きな出来ごとを期待するに決まっている。そして彼らは、ますます白痴化していくのだ。今では全世界の人間精神が衰退の方向に向かっていく。おれはそれに拍車をかけようとしている者のひとりなのだ。

そして折口は、日韓海戦をマスコミの支配から解放するため、船内の「テレビ・アイ」を破壊する。

折口はレーダーの表面のガラスを叩き割ってから、スバナを床に投げ出し、操舵室を出てブリッジの屋根へ登った。ベンチを出し、アイのアンテナをへし折って海へ抛り投げ、

さらに無線電話のアンテナをねじ切った。

これでおれは、自分を隔絶させた——折口はそう思った。
——おれはマスコミから隔絶した。

この折口の行動により、戦闘と同程度に重要視された映像の記録ができなくなり、戦闘の様子がテレビで放送されなくなった。すなわち、テレビが大衆に与える影響力を失ったのである。テレビ局に属する折口が「テレビ・アイ」を破壊することには、自身の立場を意図的に変化させようとする意志が感じられる。

次に折口は、日韓海戦の発案者である、「日本記者クラブ」の委員長隅の江に逆襲する。日韓海戦は韓国の裏切りで先制攻撃を仕掛けられ、日本船が壊滅的な被害を受ける。その時、折口と隅の江は、このような取っ組み合いをする。

隅の江の背中に折口が躍りかかった。「この人殺しめ。何人殺せば気がすむんだ！」

二人は抱きあつたまま、甲板をころげまわった。

「はなせ！ おれは参謀だぞ」

「お前にはもう、部下はひとりもない」と、折口はいった。「戦争は負けだ」

「馬鹿野郎。おれたちにはジャーナリズムがついているんだ。負けちゃあいない！」

「そのジャーナリズムが気に喰わん！」折口は叫んだ。「そのジャーナリズムがこの戦争を起した。そのジャーナリズムが皆を殺した！」折口は組み敷いた隅の江の首を締めあげた。「貴様は殺し屋だ。マスコミの殺し屋だ。貴様はジャーナリズムの化け物だ。殺してやる！」

ここでは、危機的な状況にあってもなお、ジャーナリズムにすがろうとする隅の江と、ジャーナリズムと海戦との歪んだ関係性を見抜き、否定的な姿勢を取る折口との対比が顕著である。折口のジャーナリズムに対する否定的な言動は、絶対的な影響力を持つテレビ局のディレクターという立場を放棄するものとなる。結果として隅の江は死に、折口が生き残ることからも、この日韓海戦を通じて求められていたことは、日韓海戦におけるテレビの関与を見極め、テレビの持つ影響力から脱出することだったのだ。

なお、もう一隻の船に取り付けた「テレビ・アイ」は、韓国船の攻撃によって「全部吹きとばされ」る。つまり、「疑似イイベント」として開始された日韓海戦は、二隻内の「テレビ・ア

イ」が破壊されることにより、テレビ局や大衆の期待との繋がりが途絶え、「疑似イイベント」から逸脱する。この意味で、テレビと大衆とを繋ぐ「テレビ・アイ」が破壊されることは重要な出来事なのである。

こうして日韓海戦は、韓国船が裏切って日本船に攻撃を仕掛けたために、日本船二隻ともが大破し、参加した二人のうち折口と脇田を除く著名人一〇人が死亡するという、日本の大敗で終わる。テレビを通じて大衆への強い影響力を持つ著名人が死亡する一方で、テレビの影響力に警戒心を示し、「疑似イイベント」から逸脱する意志を持つ折口と脇田が生き残ることは興味深い。折口と脇田の生存により、テレビの影響力を盲信するのではなく、テレビによる「疑似イイベント」や、大衆のテレビへの期待から逸脱する生き方の必要性が強調されるのだ。

それに対し、一〇人の著名人は「疑似イイベント」に支配された思考から脱しなかつたために、命を落とした。顕著な場面は、大衆の人気投票で一位を獲得したミュージカル俳優のジョージ・小野の最期のシーンである。テレビの力によって大衆への影響力を手に入れたジョージ・小野は、日韓海戦も作られた演技として認識していた。そのため、自身の生命が危機的な状況に陥っても、全てが演技であるという幻想に囚われ、そのまま

死んでいく。この場面からも、日韓海戦から生還するためには、テレビをはじめとするマスメディアの影響力から脱し、自力で現実を認識することが求められていたと言える。

こうして、テレビ局が企画した日韓海戦という「本番」は終わり、「時間の制限はぜんぜんない」ため、生存した折口と脇田は、脇田の郷里に向かって「ゆっくりと泳ぎ始め」る。折口と脇田は「疑似イベント」から脱し、私的で自由な時間を手に入れたのだ。その最中、次のような出来事が挿入される。

泳ぎながら折口の方を見た船長が、あふと息をのんで、彼の背を指した。「あんた！ その、背中にくつついてるものは何だね？」

折口は立ち泳ぎをしながら上衿からぶらさがっている重いものをねじ取ろうとした。

「ひやあ！ それは腕だ！」船長は海の中で腰をぬかしそうになり、あわててばしゃばしゃ水しぶきをあげた。

肘から先だけの腕が、折口の軍服の衿をしっかりと掴んでいた。

「これは隅の江の腕だ」折口は、やっとねじとった腕を、月の光でつくづく眺めながらいった。「奴、ここまで追っ

て来やがった」彼は腕を、力いっぱい遠くへ抛り投げた。「さばだ」

「日本記者クラブ」の委員長という肩書を持つ、隅の江の怨念とも言うべき「隅の江の腕」を「力いっぱい遠くへ抛り投げた」ことは、テレビの持つ影響力から脱出し、その圏外で生きることを象徴している。この場面は、折口と脇田の「疑似イベント」からの逸脱を示す。しかし、本作品はこれでは終わらない。「疑似イベント」から逸脱し、個人的な生活を送ることが困難であることも描き出す。次章で日韓海戦の五年後を描く本作品の結末部を検討する。

五、「疑似イベント」から逸脱できない葛藤

本章では、本作品のエピローグに着目し、日韓海戦と物語の結末を、ここまでの考察を踏まえて検討する。日韓海戦から五年後、折口は、「銀河テレビ」のディレクターを解任され、「アイ・センターの見まわり役」となった。また折口は、「仕事だけでなく、すべてのことに熱意を失ってしまっていた」。この様子は「原因不明の強い孤独への意志」と記される。日韓海戦

中の出来事を勘考すれば、テレビの力に頼らず、大衆の動向にも迎合せず、「孤独への意志」を追求した生き方を実践していると理解できる。

そして、折口は暢子と再会し、「局の命令で、郷里にいる脇田船長に手紙で協力してもらって書いたK作戦始末記」について話題にする。

「あの本は売れなかった」と折口はいった。「出た直後の二週間だけはベスト・セラーになりましたがね。しかし、すぐに面白くないという評判が立って……」

「あら、面白かったわ」暢子はいった。「きつと本当のことをありのままに、あなたの主観をぜんぜん混えずに書いたからじゃない?」

「そうかもしれない」
折口と暢子は、乾いた声でゆっくりと笑った。

折口は日韓海戦を記録した「K作戦始末記」を出版するも、「本当のことをありのままに」、折口の「主観をぜんぜん混えずに書いた」ため、大衆からは不評に終わる。大衆は日韓海戦という事実、「刺戟性」を加えてドラマチックに歪曲させた「疑

似イベント」としての始末記を望んでいた。そのため、この始末記を「面白い」と評価するのは、折口や脇田と同様に、マスメディアが作り出す「疑似イベント」化した社会に違和を感じていた暢子のみとなる。日韓海戦後も、依然としてテレビの影響力に左右され続ける大衆の様相と、大衆の動向から逆行する折口、脇田、暢子の対比構造は継続される。

加えて明らかになるのは、一〇人の著名人が犠牲となった日韓海戦が、社会に何の影響も与えなかったという残酷な結果である。日韓海戦後の社会の様子はこのように話題に挙がる。

しばらく黙ってから、暢子がいった。「あの戦争は結局、何にもならなかったのね?」

「そうです」折口は、のんびりした口調で話し出した。「あの直後に開かれた日韓会談にとつても、何の役にも立たなかったんです。日本は韓国に勝利を譲ったわけですが、韓国人の反日感情は、そんなことぐらいじゃおさまらない。彼らの求めていたのは、あんな表面的な罪障意識や同情ムードじゃなく、人間としての連帯感だったわけでしょうね。あんな浪曲的解決法を押しつけられては迷惑だったのでしょう。ところが日本政府は、その浪曲的解釈で会談を

有利に進めようとした。喰いちがうのはあたり前です。それから今まで、あいかわらず颯々と喧嘩したり仲直りしたりをくり返しています。漁場では、漁船同士の小ぜりあいがあとを絶たないし……」

「せっかく、たくさんの有名人が命を無駄にしたのに……」

海戦中に「テレビ・アイ」からの通信手段を失った二隻の船は、テレビを通じて「刺戟性」のある情報を発信できず、「疑似イベント」としての機能を果たすことができなかつたため、社会に何の影響も与えなかつた。そして、日韓海戦が日本と韓国とで示し合わせた通りに進行しなかつたように、その後の日韓関係も「喰いちが」いが続く。この点を冷静かつ正確に認識する折口と暢子は、「疑似イベント」やそれに翻弄される大衆から逸脱する意志を有した人物と言える。

ただ、本作品は「疑似イベント」化した社会から逸脱することが容易に達成できないことも描く。折口は暢子をデートに誘うが断られ、折口と暢子は最後まで分かり合うことはない。その後、折口はベンチに腰掛け、次のような事態に見舞われ、そのまま物語は幕を閉じる。

彼は、五年前と同じように、今でもやはりアイが自分の方を見ている筈なのに気がついた。彼は自分がいつの間にか、長い足を恰好よく組んでいるのに気がつき、あわててほどいた。

「こんなことはいやだ」と、折口はいった。「これではまるで、メロドラマのラスト・シーンじゃないか！ そんなのじゃない、違うんだ」

折口はタバコを投げ捨て、靴の先で踏みについた。できるだけ、無様な恰好を試みた。

しかし折口が、どんなにおかしな、この場にふさわしくない様子をして見せたところで、なんとかしてこの幕切れの構図を崩そうとやきもきしたところで、そこは町の夜景を背景にした丘の上——終幕に最適の場所だった。

「ちがう」折口はあわてた。「まだ終りじゃない。この話はまだ終らないんだ」

だが、じたばたし続ける折口にはおかまいなしに、夜は、ゆつくりと緞帳をおろしはじめていた。

この結末について、永島貴吉は「マスコミの演出するイベン

トの類似性に気付いた折口ではあるが、無意識のうちにマスキミのつくる幻想を模倣²³している指摘し、折口の行動自体を「疑似イベント」から逃れられないものとする。たしかに、折口はこの結末部において、序盤の時点で「疑似イベント」から逸脱していた暢子に見捨てられ、「テレビ・アイ」を意識することに煩悶するため、「疑似イベント」から逸脱したとは言えない状況となる。つまり、折口は、「疑似イベント」から逸脱する意志を有しながらも、容易に逸脱できない葛藤を抱えた人物となる。

さらに注目すべきは、「終幕」や「緞帳」といった演劇の用語で情景が描写されることである。折口が「この話は終わらない」と、作中人物でありながら物語そのものに言及することと合わせ、メタフィクション性が見られる。この結末部では、読者が「この話」の観客に位置するのだ。すなわち、折口が「疑似イベント」からの逸脱を意図しても実現できず煩悶する様子²⁴を、読者が「テレビ・アイ」の視点から眺めるといふ構図となる。折口は、物語を通して一見「疑似イベント」から逸脱したかのように見える。だが、暢子とは失念し、「テレビ・アイ」を再び意識して「無様な恰好」を見せることで、読者に嘲笑される存在となる。つまり、この結末部は、「疑似イベント」からの

逸脱を意識しても、容易には達成できない現実を風刺するのだ。

おわりに

本稿は、筒井康隆「48億の妄想」において、折口、脇田、暢子の三人に着目し、先行研究が等閑視した「疑似イベント」からの逸脱について考察した。「疑似イベント」とは、アメリカの文明史家D・J・ブーアステインが表した、マスメディアによって作られる出来事のことである。筒井はこの「疑似イベント」に影響を受け、本作品の主題に活用した。また、作中で描かれる日韓問題はあくまで手段であり、日韓問題を通して描かれる折口、暢子、脇田の物語にこそ、本作品の主題が表れると示した。注視すべきは、マスメディアの影響力に翻弄される大衆と、その影響力に懐疑的な折口、脇田、暢子という対比構造である。特に、「銀河テレビ」のディレクターである折口は、物語中で自身の立ち位置を捉えなおし、テレビの力を再認識するという重要な役割を演ずると指摘した。

また、作中の日韓問題は、テレビ局が事実を歪曲して刺戟性を付す「疑似イベント」と関連付けて捉えられるものである。中でもテレビ局と大衆とを繋ぐ「テレビ・アイ」が重要な意味

を持つ。日韓海戦に出撃した船に取り付けた「テレビ・アイ」が破壊され、テレビとの繋がりや断ち切れたために、日韓海戦は「疑似イベント」とはならなかった。さらに、日韓海戦の参加者のうち、テレビの影響力を盲信した著名人が死亡し、テレビに懐疑的な折口と脇田が生還した。そして、折口と脇田が書いた始末記が世間で不評となる中、暢子だけが面白がった。このことから、折口と暢子と脇田が「疑似イベント」から逸脱する意志を有すると言える。だが、同時に大衆から孤立することとなった。加えて、折口が「疑似イベント」から逸脱する意志を有するも、容易に達成できない葛藤を抱える様子を、読者の視点を通じて嘲笑されることを論証した。

したがって本作品は、「疑似イベント」に翻弄される大衆の姿と、「疑似イベント」化した社会を疑問視し、そこから逸脱していく折口、脇田、暢子と、完全には逸脱できない折口の煩悶とを描く。それにより、「疑似イベント」から逸脱してマスメディアや大衆の動向に囚われない生き方を目指す必要性を示しつつ、その生き方を容易に達成できない現実を風刺するのである。

〔注〕

- (1) 石川喬司「推理・SF界1966」(日本文芸家協会編『文芸年鑑昭和四十二年版』、新潮社、一九六七年五月)
- (2) Daniel J. Boorstin, *The Image: A Guide to Pseudo-Events in America* (1962) (D・J・ブーアスティン／星野郁美、後藤和彦訳『幻影の時代：マスコミが製造する事実』、東京創元社(現代社会科学叢書)、一九六四年一〇月)
- (3) 石川喬司「筒井康隆論」(筒井康隆『ベトナム観光公社』、早川書房(ハヤカワ・SF・シリーズ)、一九六七年六月)
- (4) 権田萬治「ナンセンスの詩学」(別冊新評『筒井康隆の世界』、新評社、一九七六年六月)
- (5) 奥野健男「『空間』の革命的抒情詩人」(『国文学』、解釈と教材の研究』第二六巻第一一号、一九八一年八月)
- (6) 柘植光彦「筒井康隆の方法」(『現点』第六号、一九八五年一月)
- (7) 巽孝之「パラノイド真理省…『48億の妄想』以後」(伊藤靖編『文芸別冊『総特集』筒井康隆…日本文学の大スタア』、河出書房新社、二〇一八年一〇月)
- (8) 関井光男「作品への視点・筒井康隆の世界」(『国文学』、解釈と教材の研究』第二六巻第一一号、一九八一年八月)

- (9) 扇田昭彦「筒井康隆の仮面の劇場」(『国文学・解釈と教
材の研究』第二六卷第一号、一九八二年八月)
- (10) 日下三蔵「編者解説」(日下三蔵編『筒井康隆コレクショ
ンI 48億の妄想』、出版芸術社、二〇一四年一月)
- (11) 日下三蔵「新編 筒井世界の歩き方」(伊藤靖編『文芸別
冊「総特集」筒井康隆：日本文学の大スタア』、河出書房新社、
二〇一八年一〇月)
- (12) 佐々木敦「SFの時代」(佐々木敦『筒井康隆入門』、星
海社(星海社新書)、二〇一七年九月)
- (13) 前掲(2)
- (14) 筒井康隆「大きなテーマを一人称で(漂流 本から本へ…
44)」(『朝日新聞』二〇一〇年二月二日朝刊)
- (15) 筒井康隆「あとがき」(筒井康隆『48億の妄想』、早川書
房(日本SFシリーズ)、一九六五年二月)
- (16) 筒井康隆、玉城正行、柘植光彦、永島貴吉、与那覇恵子
「虚構への航跡」(『現点』第六号、一九八五年一月)
- (17) 三浦雅士「解説」(『筒井康隆全集 第2巻』、新潮社、
一九八三年五月)
- (18) 平岡篤頼「解説」(筒井康隆『48億の妄想』、文藝春秋(文
春文庫)、一九七六年二月)
- (19) 例えば、無署名「済州島沖で漁船射たる」(『朝日新聞』
一九五二年一〇月一日朝刊)では、「朝鮮済州島の牛島東
方三十マイルからやや南寄りの海上(日本領海内)」で操業中
の静岡県志太郡小川港所属豊国丸(二七トン) 船長橋ヶ谷
作次氏(二二) Ⅱなどイカつり漁船約四十隻が、同日午前三
時ごろ三隻の小型船団から約千メートルの距離で機銃、エイ
光弾の掃射を受けた」と報じられた。
- (20) 前掲(15)
- (21) 前掲(15)
- (22) 永島貴吉「筒井康隆論——小説の自立・虚構の自立」(『現
点』第六号、一九八五年一月)
- (23) 前掲(8)
- (24) 前掲(22)
- (25) 前掲(22)
- ・本文の引用は『筒井康隆全集 第2巻』(新潮社、一九八三年
五月)に拠る。
- (まつやま さとし／本学大学院生)